

# 平成18年度受託研究員報告

## —日本語教員再研修—

赤木 弥生

### 要旨

中国人材育成事業による受託研究員として中国西華大学外国語学院日本語講師劉玉茹氏が、平成18年度、山口大学国際センターで1年間の教員研修を受けた。本稿では、日本語教員再研修プログラムの報告および教員研修のあり方について検討した。教員研修では、コミュニケーション・アプローチとそれ以前の指導法とを比較対照させながら、日本語学習支援の指導方法について学び、学習者に則した適切なアプローチを教師自身が編み出し、言語学習を効果的に手助けすることのできる教師力を養うものである。

### キーワード

日本語教育 教員再研修 コミュニカティブ・アプローチ 文化指導 認識

### はじめに

中国成都市西華大学外国語学院日本語講師劉玉茹氏（以下劉講師）が平成18年8月から19年7月までの1年間、山口大学国際センターで受託研究員として教員研修を受けた。本稿では、1年間の研修について報告すると同時に、中国の日本語教育を踏まえた日本語教員研修のあり方について検討する。

## 1. 受託研究員

### 1-1 国際センター受入れ受託研究員

平成16年山口大学における受託研究員の受入れが開始したと同時に、日本語教員の受入れも始まった。平成16年から19年の4年間で、4名が研修を受けている。そのうち3名は6ヶ月間であったが、劉玉茹氏は、1年間滞在した。この他に貴州大学からの日本語教員1名が外国人研究者として大学院に入学し、

修士課程を修了している。

### 1-2 平成19年度山口大学受入れ受託研究員

受託研究員のほとんどは理工系に集中しており、平成19年度の受託研究員も以下の表2に示すように、理工系教員が<sup>37</sup>名と圧倒的に多い。その内32名が西華大学（以下西華大）工学部教員であった。3ヶ月毎に8名ずつ教員を派遣する計画に伴い、言語、生活支援のできる日本語教員1名を派遣することになったようである。工学部教員の研修には言語の問題が大きく、日本語も英語もできない教員がほとんどで、研究室でのコミュニケーションにも困ることが多いため、工学部教員と日本語教員とを同時に派遣する形をとることになったようである。これは、島根大学の受託研究員も同様の形をとっており、寧夏大学から工学部教員と日本語教員が同時に派遣され、日本語教員は工学部教員の通訳や生活支援を行っている。すなわち、日本語教員来日の目

表1 国際センター日本語教師・受託研究員受入れリスト(研究者交流係 渡辺早苗係長)

	氏名	期間	出身大学	学部・指導教員
1	王育虹	H16. 4~H16. 9	貴州民族学院	国際センター・渡辺
2	楊清玉	H17. 4~H17. 9	遵義医学院	国際センター・今井
3	胡啓敏	H17. 7~H18. 3	貴州民族学院	国際センター・杉原
4	劉玉茹	H18. 7~H19. 7	西華大学	国際センター・赤木
5	胡嘉明	H18. 7~H19. 7	貴州大学	人文学部(外国人研究者)

的のひとつは、工学部教員のサポートであるとの認識が日本語教員自身にもあり、自己研修や研究が主目的ではないケースもある。

以下は、国際課研究者交流係 渡辺早苗係長の平成19年度受託研究員報告である。

法人化に伴う学内規則見直しの際、受託研究員受入規則を整備し、海外の機関からの委

託に基づき、研究指導を目的とした現職技術者及び研究者を受託研究員として受け入れることが可能となった。平成18年度受け入れの学部別詳細は下記のとおりで、国際協力銀行の円借款事業のひとつである「中国人材育成事業」により派遣される中国高等教育機関の教職員を受け入れている。

表2 平成19年度受託研究員受け入れ人数

受入部局	受入数	派遣元大学
農学部	1	江西師範大学
理工学研究科(工)	3	安徽理工大学、江西師範大学、広西師範大学
医学系研究科(医)	2	貴陽医学院、安徽大学
技術経営研究科	34	西華大学、江西師範大学
大学教育機構(国際センター)	1	西華大学

国際協力銀行(JBIC)の円借款による人材育成事業

中国における市場経済化・格差は正に寄与するために、内陸部の12省・市・自治区にて、地域活性化・交流、市場ルール強化、環境保全分野の大学を対象にハード面(校舎・設備の整備)やソフト面(研修等の実施)への支援を開始。

・現在は対象地域を拡大

陝西省、甘肅省、四川省、重慶市、雲南省、湖南省、新疆ウイグル自治区、広西壮族自治区、貴州省、吉林省、安徽省、河南省、青海省、寧夏回族自治区、黒龍江省、江西省、湖北省、山西省、内蒙古自治区、遼寧省、河北省、海南省

受託研究員の研修目的

上記の受託研究員報告(渡辺)によると、中国人材育成事業では、研修の内容、目的を以下のように示している。

・研修内容

対象高等教育機関の教員が日本で教育施設や専門分野の研修を行う。

対象高等教育機関の職員が日本で学校運営関連の研修を行う。

・目的 高等教育の質の確保、強化

以上のように具体的な内容は示されていない。受け入れ機関、受け入れ指導教員に一任されているのが現状である。これは、受託研究員が、教員経験年数、研究歴などひとりひ

とり異なっているためと思われる。すでに博士号を取得している教員もいれば、大学を卒業したばかりの若い教員もいるなどアカデミックな背景が大きく異なっているため、指導教員が受託研究員ひとりひとりの経験を考慮し、指導する必要がある。

劉講師の場合、来日前、JBIC 申請書「APPLICATION FORM Continuing Education Program of Talent Training Project with Japanese Loan」様式に、以下のように研究内容、研究計画について記述していた。非常に簡単な内容であったため、来日後、研究内容、研究計画について話し合ったが、教員経験年数も4年と浅く、研究歴もないことから、最初からテーマを決めて研究することは難しいとの本人の主張を尊重し、研修を受ける中で研究テーマを見出していくこととした。また、西華大で担当している日本語初級レベルの文法指導など授業に直接役立つこと、また日本語の先行論文、専門書など中国では読む機会の少ない書籍の読破を希望した。このため、日本語力および教師力の向上を目指し、幅広い活動を通して、研究力を培うことにした。また、教師力、研究力の向上と同時に、日本語力のアップ、日本文化理解を深めるため、ゼミ、授業補助、研究補助、学会参加を通して、なるべく日本語でコミュニケーションを図ることを目指した。添付資料に示したように学内、地域で行われる交流事業への積極的な参加を勧め、新留学生オリエンテーション、日本語スピーチコンテストなど多くの国際センター行事に参加し、補助活動を行う過程で、コミュニケーション能力を培った。

来日前記入のJBIC 様式から

10. Outline of Present Research/Work (*English or Japanese*)

1, 日本語の学習策略の研究

語彙の学習策略, 文法の学習策略, ヒヤリングの策略, 閲読の能力のトレーニング

- 2, 日本語の教え方の研究
- 3, 第二言語の学習過程の研究

13. Research/Work Plan at the University in Japan (*English or Japanese*)

Please outline in detail. Additional sheets may be added if necessary.

2006年4月-2006年6月

外国語の教え方, 心理学, 言語学, 教育学についての書籍を読む。

2006年7月-2006年9月

日本語の教え方と学び策略について論文を書く。

2006年10月-2006年12月

第二言語の学び方についての書籍を読む。

2007年1月-2007年3月

第二言語の学び方についての論文を書く。

## 2 教員研修

### 2-1 研修プログラム

言語教育は、1980年代後半以降、第2言語習得論や心理学分析などに裏づけされたコミュニケーション・アプローチによって劇的な変化を遂げ、変革的な言語教育が世界中に流通すると共に、教員再研修が広く行われるようになった。通常、教員研修では、四技能の養成をはじめとする学習者中心の授業などコミュニケーション・アプローチの指導法についての研修が行なわれる。

中国でも、改革開放が進められた80年代以降、大学入試制度が導入され、経済特区の制定などによって経済発展が急速に進められることとなり、英語教育が重視されるに伴い、英語教員研修が、英語圏の大学やボランティア組織などから派遣される講師らによって幅広く行われるようになった。一方、日本語教育では、国際交流基金による教員研修が中国、日本で行われているが、英語教育とは異なり、小中高の日本語教育が主流ではないことから、

地方での教員研修会などはほとんど行われていない。このような状況において多くの日本語教師は、最新の日本語教育法の情報や知識に触れる機会がほとんどないといっても過言ではない。したがって、日本語教師に対する教員再研修は、日本語を効果的に指導し、日本文化理解を深める上において重要であると考えられる。

国際交流基金が行っている日本語指導者養成プログラム修士コースでは、以下のような科目が設定されており、これらの科目の中から選択し、受講する。

言語領域：日本語表現法演習，日本語学Ⅰ・Ⅱ，言語学概論，社会言語学，対照言語学，認知言語学・心理言語学  
 言語教育領域：日本語教育概論，日本語教授法Ⅰ・Ⅱ，第二言語習得研究，言語教育法，教師教育論，日本語教育演習Ⅰ・Ⅱ，日本

語教育実習，日本語教育特定課題論文  
 社会・文化・地域領域：日本の歴史と文化，現代日本の社会と教育，言語教育政策，日本文化教育研究

劉講師は、1年間の教員研修であったため、教授法，文法，文化，日本語の3分野に焦点を置いて研修することにし、言語，言語教育，社会・文化・地域領域の各領域から最重要科目について毎週ゼミ形式で指導を行った。指導内容は以下に示した。

さらに、日本語，日本文化学習として、学内，地域で実施されている日本文化体験プログラム（書道，華道，茶道）を受講し、ホームステイでは、日本の日常生活について体験した。また、地域の国際交流プログラムに参加し、多くの日本人と交流し、日本人，日本文化に対する理解を深めた。

表3 指導科目概要

言語領域	
科目名	授業概要
日本語表現	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際センター日本語授業の履修</li> <li>・日本語上級授業を受講し、リーディング，ライティング練習を行い、感想文，レポート，論文を読んだり，書いたりする力を培う。</li> <li>・ゼミにおいてのレポート作成，発表，ディスカッションを通して表現力，コミュニケーション能力を伸ばす。</li> </ul>
日本語学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語の特徴的な側面（音韻，文字，語彙，語法）について取り上げる。</li> <li>・日本語初級授業の補助を通して，文法指導法について学ぶ。</li> <li>・研究室訪問を行い，日本語学について学ぶ。</li> </ul>
言語教育領域	
日本語教授法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言語教授法，アプローチを対照比較させ，「学ぶ」という視点から「指導」について考える。</li> <li>・言語習得理論について学び，母語干渉などによる学習上の困難点について検討し，第二言語学習への方策を検討する。</li> <li>・発音指導，文法指導，コミュニケーション運用能力養成に関する具体的な方策を検討する。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会言語学の領域「待遇表現」「言語行動様式」など日本語でのコミュニケーションの特徴的な点を取り上げる。</li> <li>・ユネスコ言語教育委員会「リンガボックス」の提唱する「平和と理解に寄与する言語教育」について考える。</li> </ul>
日本語教育演習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語初級授業を見学し、「学び」の観点から授業分析を行い、レポート作成を行い、ゼミで話し合う。</li> <li>・授業実習を行う。他の教員らに授業を見学してもらい、意見を聞き、指導力を高める。</li> </ul>
論文指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎回「学び」の視点から課題を決め、授業見学を行い、レポート作成を行う。</li> <li>・論文テーマを設定し、作成する。</li> <li>・学会出席、他大学受託研究員交流を行い、研究方法についての知識を深める。</li> </ul>
社会・文化・地域領域	
日本の歴史と文化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本事情の授業を受講し、日本文化について理解を深め、文化の背景を知り、文化を相対的に見る力を培う。</li> </ul>
日本文化体験プログラム	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際センターで実施している書道、華道、茶道を受講し、体験を通して文化理解を深める。</li> <li>・ホームステイを体験し、日本人の日常生活に触れ、日本への理解を深める。</li> <li>・地域で行われる「りんご狩り」、交流会などに参加し、日本人との交流を深める。</li> </ul>

### 3-2 言語教授法

日本語教授法の中で、先ず言語教授法を取り上げ、コミュニケーション・アプローチ以後生み出された多くのアプローチの特徴的な側

面を比較対照することによって言語はいかに学ばれるかについて考え、学習上有効なテクニック、ストラテジーなどについて学んだ。主として取り扱った内容を以下の表に示した。

表4 言語教授法概要

	題	内 容
1	学習の観点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「学ぶ」ことは、いかにして起こるのか。</li> <li>・言語習得，第二言語習得理論</li> </ul>
2	言語教育の変遷	<ul style="list-style-type: none"> <li>・構造言語学，翻訳法からコミュニケーション・アプローチへ</li> </ul>
3	言語理論	構造的，機能的，相互交流の観点とは
4	言語学習理論	活発な学習に必要な条件
5	コミュニケーション・アプローチ（CLT）の言語理論	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーション運用能力の養成，コミュニケーションと文化は結びついているなどについて。</li> <li>・文法指導の観点</li> </ul>
6	オーディオ・リンガル教授法とCLT	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言語学習，教授法，コミュニケーションなどについての比較対照</li> </ul>

7	各アプローチの学習理論, 言語理論	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ TPR ～ 「動き」</li> <li>・ Natural Approach ～ 「観察」「インプット」</li> <li>・ カウンセル・ラーニング～「不安・恐怖心の除去」</li> <li>・ サジェストベディア～無意識, 非理性的な力の利用</li> <li>・ サイレントウエイ～「発見」「誤りの訂正」「記憶と定着」</li> </ul>
8	インダクティブ・ディダクティブ	・ 講義形式, 演繹的指導法
9	ストラテジー	・ リーディング・ストラテジー・ライティング・ストラテジー
10	体験学習サイクル	インプット, 体験, 内在化

## 2-2 日本語教育演習

### i) 日本語授業見学

日本語教育演習として, 日本語初級授業に参加し, 教師の補助を行い, 具体的な指導法について学んだ。劉講師は, 西華大において日本語専門と非専門の両方の学生に精読と文法の授業を行っている。精読は, 日本語カリキュラムの中では中心的な科目で, 初級レベルから上級レベルまでであるが, 劉講師は1年生の初級レベルを担当している。このため, 初級文法の効果的な導入, 指導法に特化し学ぶこととした。後期, 授業実践を行った。

国際センター初級授業(赤木担当)では, 日本語教科書「みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ」(スリーエーネットワーク)を使用し, 副教材として翻訳文法解説, ビデオ, 絵教材などの周辺副教材を用いた。また, 文法導入, グループ, ペア練習のための活動は以下の活動集を利用した。

- 1) 「絵で導入・絵で練習」(足立章子ほか, 凡人社, 2004)
- 2) 「日本語コミュニケーションゲーム80」(CAGの会編, The Japan Times, 1998)
- 3) 「初級日本語ドリルとしてのゲーム教材50」(栗山昌子ほか, アルク, 1992)

留学生の国は, 中国, モンゴル, ベトナム, バングラデッシュ, アメリカ, カナダなど複

数の国に及ぶため, 共通言語を用いての文法解説はほとんど行わず, 文法導入は絵教材やレリアなどを利用し, 意味を取らせる直説法を用いることが多い。さらに, 学習者中心の授業を展開し, グループ, ペアワークを通して学習者が十分オーラル練習のできる機会を作る。ペアワークの間, 教師は, 導入項目が理解できているかどうかを確認し, 理解への手助けを個別に行う。オーラルな練習を通してコミュニケーション運用能力を培う機会を多く作る。導入項目の意味が理解できない場合や文法解説を求める学生がいるときは, 学生が理解できるように英語や中国語など母語と比較対照させ理解を促す。また学生が混乱してしまっている場合には, 英語を使って解説をすることもある。講義形式(inductive)で文法解説をすることは, コミュニカティブ・アプローチ以前の教授法でよく使われていた指導法である。しかし, コミュニカティブ・アプローチでは, 談話などの文脈の中で意味を理解していくという演繹的な手法が持ちられる。したがって, 学習者が間違った理解をし, 混乱した場合も, 教師は, 学習者が理解できるように導いていかなければならない。

このような指導法について, 劉講師は, 言語教授法で理論的に学び, 授業で実践的な指導法を体験したが, 当然, 中国国内の日本語

教育は、外国語としての日本語教育であり、第二言語として日本語を学ぶ留学生の日本語教育とは、時間数、学習環境、動機など多くの点で異なる。したがって、中国の日本語教育にすべてを応用することは不可能であるが、基本的な指導テクニックを応用し、授業を行うことは可能で、教師自身が、学習者のニーズ、学習環境などを考慮した上で、学習者のために最も適切なアプローチを作っていかなければならない。どのようなアプローチが学習に役立つかを常に実験的に試し、効果的な方法を見つけていくことが教師の役目である。指導要領、試験制度など制約の多い中で授業を強いられている教師にとって新たな指導法を試していくことは、チャレンジではあるが、学習効果という大局的な観点に根ざし、実践していくことが必要である。

研修後、大学に戻った劉講師が研修成果を授業にどのように生かしているかについて、西華大を再訪問し、授業見学を行うなどし、分析する予定である。

## ii) 授業実習

劉講師自身が授業実践を行った。授業計画を作成し、授業を行ない、授業終了後は、授業分析を行った。授業は、絵教材、レアリアなどを利用して、文法導入を行い、文法解説は最小限に抑えられていた。また、ペアでのオーラル練習などはよく準備されており、学習者間のコミュニケーションも活発に行われた。

西華大の日本語教育では、教科書の翻訳、文法解説が中心的な指導法となっている。新任教師は先輩教師の指導によって、指導の方法を学ぶが、自立後も先輩教師が授業見学などを行ない、指導の標準化を図っている。教科書の本文を翻訳し、意味の解説などを行う翻訳法、構造文法からの文法指導法がとられている。劉講師自身も大学で日本語を専攻したが、このような方法で日本語を学習してき

た。このため、授業で取り上げた文法項目「あげる・もらう・くれる」は、「授受」、「～してあげる」は、「恩恵」など劉講師自身が文法用語で理解しようとしていることから、授業でもこれらの文法用語を使用していた。このような文法用語による解説だけでは、学習者の理解には繋がらず、機能的、場面的な文脈の中で、具体的な用法を練習することが学習にとって有効であることを認識するように促していった。

翻訳法も人的交流が進む以前は、ビジネス、交流では翻訳作業が主流であったため、文面を正確に訳す必要があり、有効な時代があった。しかし、人物交流やインターネットでのコミュニケーションが盛んになった今日では、コミュニケーション能力が必要となり、言語指導法が大きく変化を遂げてきた。このような時代のニーズに応じて、大学でもビジネス日本語が取り入れられつつあるが、教師不足などから、西華大では実施されていない。

一方、中国の学生の言語スキル養成に対するニーズは高く、コミュニケーション能力を高める授業を望んでいる。ほとんどの大学では、日本人教師1名を採用し、「みんなの日本語」を使い、1年生を対象に、言語スキルの養成を行っているが、十分ではない。こういった学生のニーズを反映し、会話の授業やスピーカーズ・コーナーなどオーラル練習のできる機会が学内にある。また、英語専攻の学生や他の学部の学生が日本語を学習しているが、翻訳法で指導しているため、教養的な日本語にとどまっている。研修期間中の成果を活かし、適切な指導法や教材を用いることによって、非専攻学生の日本語教育も改善されるものと期待する。

## 3 教師の役割

世界の言語教育の動向としてユネスコ言語教育委員会「リンガボックス」について紹介

し、言語教師の役割について考えた。ユネスコ言語教育委員会「リンガボックス」とは、「言語教育こそが世界の平和と国際理解に最も寄与することのできる授業であることを教師は認識するべきである」と提唱している。授業では「人々の日常生活」を指導し、学習者の交流、文化交流を進め、教材作成を行うことが重要であると述べている。

90年代までの中国では、「教職は聖職であるという」考え方があった日本の教師のように、教師が尊敬される対象ではなかった。むしろ、地位の低い職業とみなされていた。その後、大学入試の導入、経済発展の潮流に乗って、教育を重視する社会の変化に伴い、教師の地位も上がってきた。しかし、教師自身の意識も同時に上がってきたといえるかどうか疑問である。

言語教師にとっては、言語の指導は大きな任務であるが、その深層には、言語を学ぶことによって、学習者が文化理解を深め、文化間の連帯意識を培うということを認識しておくことが重要である。教師の「信念」は、個々に異なるものであるが、その信念にはリンガボックスの理念などが反映されることが望ましいと考える。

#### 4 論文研究

西華大では教員の研究力の向上を目指し、毎年、論文発表を奨励しているため、劉講師にとっても、論文作成が課題となっている。しかし、論文作成のための素材を見出すことが困難な状況にあったことから、現状分析を行うこととした。問題点を洗い出し、その問題点を分析することによって、学習者のニーズなどが見えてくる。まず、西華大学の日本語教育について調査・分析することにした。その成果は、2007年度大学教育機構紀要「大学教育」に「西華大学日本語教育事情報告」として発表した。日本語での執筆は負担が大

きいため、授業報告などのレポート作成から始め、日本語でのライティング、論文作成について学んだ。

また、中国語での論文「日本語学習者の自主的な学習能力の養成」(江南大学学报 第1期 第27巻)を2007年3月発表している。

国際センターでは、コンピュータによる日本語能力テストを開発しているが、文字語彙問題アイテム作成に協力し、アイテムライターが作成した問題の中に中国語の語彙と同じものが含まれていないかどうか、劉講師がチェックを行った。西華大でのパイロットテストへの協力、コーパス学会への参加を通して研究協力を行っている。

#### 5 中国の大学視察

##### 5-1 西華大学

平成19年3月、西華大学尹徳謨外国語学院長を表敬訪問し、意見交換を行い、日本語教員との懇談会に出席した。また、学院施設を視察し、日本語専攻の授業参観および授業を行った。

外国語学院には、メディア教室が設置されており、日本語、英語専攻の学生は、メディア教室で授業を受けている。メディア教室の机にはモニターが設置され、ブース形式になっている。中国の大学でのコンピュータ、インターネット環境は未整備だが、言語学習用LL教室が普及している。見学した授業では視聴覚教材は利用しておらず、教科書をモニターに映し出しているのみであった。現在、日本語教育では、DVDなどの視聴覚教材は豊富にあるというわけではないが、既存の教材を活用するだけでもメディア教室を有効利用できるのではないかと感じた。会話、文化指導の点からも視聴覚教材は有効であることから、今後、中国人学習者向けデジタル化教材の研究開発が急務であると考えられる。

また現在、外国語学院では、英語学科に続

いて、日本語学科大学院の設置を目指しており、教員の研究力を上げるための協力を尹学院長から要請された。日本留学のための日本語教育の実施に向け、中国人学習者向け教科書、教材作成など日中共同で研究開発を進めていく必要があり、継続して連携を図り、日本語教育支援を行っていく必要があると考える。

#### 5-2 中国の協定校視察

山口大学の協定校である北京人民大学、北京師範大学、上海交通大学を劉講師と共に訪問し、日本語教員らと学术交流を持ち、中国の大学の日本語教育の最新動向の聞き取り調査を行ったが、以下のような有意義な情報が得られた。

北京人民大学は外務省などの政府機関への人材育成を担っており、現在は大学院教育が中心となりつつある。非専攻学部生の日本語受講希望者も多いが、大学院教育に重点を置いているため、受講者数は制限せざるを得ないという。日本語教員研修があれば、是非取り入れたいとのことであった。

北京師範大学は、中国の教育機関の中核を担っている。通常、師範大学を卒業し、教師となる場合が一般的であるが、大学の日本語学科を卒業して教師となる場合もある。大学の日本語学科が、翻訳や文学専攻であるのに対し、師範大学では、教育専攻である。

上海交通大学では、「みんなの日本語」(スリーエーネットワーク)を用いて、日本人教師とのチームティーチングを行っている。中国のほとんどの大学で日本人教員1名を1年契約で採用し、「みんなの日本語」を使い、会話を指導しているが、チームティーチングはほとんど行われていないが、今後、徐々に他機関にも広まっていくと思われる。世界的には、小中高で一般的となりつつあるチームティーチングではあるが、中国では大学から始まっていることは興味深い。チームティー

チングを行うことによって、中国人教員の日本語スキルアップになり、メリットは大きく、日本留学経験者が教師となるケースが増えていくに従い、チームティーチングも増えていくものと考ええる。上海交通大学では、教科書も中国国内発行の教科書は用いておらず、日本で出版された教材を使用しているが、今後、中国人学習者に特化した教材開発が必要との認識を強めているという。また、日本語専攻の学生は、英語学習にも力を注いでおり、日本語と英語の両方ができる人材の育成を目指している。それは、中国沿岸の経済特区における企業のニーズがあり、日本語能力だけでは就職が難しい状況にあるからという。日本語、英語専攻の学生が、両方の言語に精通することは、就職率アップ、文化理解など多くの利点があり、指導法を工夫することで、地方大学の学生も、上海交通大学のように両方の言語のレベルにアップが可能ではないかと考える。

## 6 研修後の研究活動

#### 6-1 西華大での授業見学

教員研修では、研修終了後、大学に戻り、授業を行っている教師を訪問し、現地での授業を見学し、授業分析などを通してさらに指導を行うが、筆者は平成19年3月、西華大を訪問し、劉講師の授業見学を行う予定である。研修後と研修前とは異なる点が授業に盛り込まれているか、それは学習上有効であるかどうかなど劉講師と話し合い、西華大の学生にとっての最善の指導法について検討する予定である。また、現在、劉講師と共同で開発中のデジタル教材を用いたモデル授業を行うと同時に日本語教員らを対象とした教員研修会を行う予定である。

#### 6-2 日中共同デジタル教材開発

劉講師と日中共同開発でデジタル日本語教

材を作成する計画を進めている。西華大のマルチメディア教室で視聴覚教材として利用できる教材で、文化への理解が深められる教材作成を目指している。

西華大では、中国の多くの大学で使用されている中国国内発刊の教科書が用いられている。これらの多くの教科書は、表現が古い、会話がないう、文化紹介がほとんどないなどの問題が指摘されてきたが、現在、これらの問題を解消すべく、ほとんどの教科書が改訂されてきている。さらに、新たな教科書も出版されるなど、教科書の選択肢が増えつつある。一方、上海交通大学のように日本で発刊された教科書を使う傾向も出始め、教材選択に新たな動向が生まれつつあると言える。学習時間数、学習目的などを考慮し、中国の学習者に特化した教材の開発が急務だが、教材開発は国家あるいは大学機関レベルのプロジェクトと捉えられている傾向があり、個々の教員の研究として捉えられていない。ひとりひとりの教師が、教材作りをすすめていけば、豊富な教材が生まれてくるはずであり、個々の研究者の研究開発が良い刺激となることを期待する。

現在使用されている教科書は、指導要領(大綱)が定める語彙表現に添って作成されている。また、指導要領に基づいて作成される試験(4級試験)など卒業要件である試験に合格するためには、それらの教科書に添って授業を進める必要があると考えられている。ただ、ほとんどの日本語専攻の学生の場合、日本語能力試験1級(国際交流基金)を目指しており、4級試験以上の日本語能力養成を目指している。また、非専攻の学生には、決まった試験は課されていない。要は、指導要領から逸脱し、個々に教科書を選択し、授業を行うという形は中国では一般的ではないということである。これは、日本の文部科学省の指導要領を考えても容易に理解できる。上海、北京などで行われているカリキュラム、シラ

バスが踏襲されている以上、教科書も同じものが使われるのは当然である。上海交通大学などの新たな試みが認知されるようになれば、地方大学にも新たな教科書、シラバスなどが導入される可能性はあるだろうが、時間がかかりすぎるのが問題で、地方の大学であっても、各大学の学生のニーズに即した教科書作成を積極的に研究課題として開発していく必要があり、日本との共同開発が良いきっかけとなることを願っている。

## 7 教員研修における課題

受託研究員などの日本語教員研修は、すでに第一線で活躍している教師の再教育であり、新たに教員になる人のための教員養成とは異なる側面を持っている。教師としての信念を持ち、教授経験も豊富な教師が心機一転教員研修において自らの日本語のスキルアップ、指導法の見直しをする過程において、教師としての自己を否定されると感じることもあり、心理的な葛藤が伴い、革新的な指導法を受け入れていくことは容易ではない。再教育としての研修では、授業や研究の補助など助手としての活動を中心に共同作業を行い、連帯意識を強め、研究員として敬意を払い、学習の視点に立った指導法に対しての認識を促していく方法が有効である。

## 8 おわりに

中国での日本語教育の発展は政治的な動向に影響を受けてきた。70年代、日中国交回復後、日本語が大学に導入され、80年代、改革開放後、経済発展に伴い、日本語学習者が増えてきた。国際交流基金の調査では、70年代、日本語教育を行っているところは、13機関しかなかったが、1998年には、1098機関、日本語教師は約5,000人で、約25万人が学んでいる。実態はもっと学びたい人がいると思われる。

しかし、教師不足、教室不足などが原因で学べない人が多い。北京人民大学の日本語教授らとの懇談で、「青海省から日本語教師の派遣要請があったが、行ける人がいない。短期間でもグループを作って教えに行きたい」という話を聞いた。中国国内に日本語を学び、日本語学習を通して日本人や日本文化を理解してくれる人たちがこれだけ多くいることを日本語教育関係者は再認識し、中国との連携を深め、教員研修、日本語指導をボランティアレベル、研究者レベルで展開していくことが急務であると考える。

英語教育では、80年代からすでに多くのボランティア講師や学生が英語圏から各省に派遣され、教員研修、英語スキルアップを行っ

ている。それは、NGO、NPOなどの団体が中国とのパイプを築いているからである。中国は、距離的に近く、教育水準の高い日本に支援、連携を求め続けている。

今回の劉講師のように、日本で研修を受けた教員と連携を図り、中国国内での教員研修を開催し、中国の教員が自律し、独自に研修を行っていきことができるように支援していかなければならない。このような日本語教育支援は、日本留学を希望する中国人学生が中国国内で日本語を学習できる機会を増やしていくことになり、優秀な留学生の獲得にも繋がると思われる。

(国際センター 講師)

表5 受託研究員研修日程

月日	行 事	場 所	内容・備考
7月31日	来日	山口大学	
8月1日	手続き 日程調整	国際課	
8月6日～7日	シェフィールド大学大学院通信課程セミナー	広島	J-CAT 補助 日本語教授との懇談
8月～9月	日本語教育研究	山口大学	先行論文、日本語教育図書
9月22日	企業見学会		中国通産局
9月23日	日本語教室開始	山口国際交流会館	山口県国際交流協会
10月3日	J-CAT プレースメント テスト	メディア基盤センター 共通教育	国際センター
10月2日	日本語授業開始		
10月4日	りんご狩り	徳佐	山口留学生交流会
10月27日～28日	新留学生研修会	徳地少年自然の家	国際センター
11月2日	3 大学交流	山口大学	公州大学・山東大学・山口 大学学生交流 通訳ほか
	研究室交流	教育学部	吉村研究室ゼミ出席
	文化研修	京都・奈良・東京	自主研修
11月2日 8日	日本文化体験開始書道・ 華道	国際センター	

11月	日本語教師養成講座	宇部福祉会館	日本語クラブ宇部
11月	外国人児童の日本語教育視察	大歳小学校	日本語クラブ山口
11月25日	日本語スピーチコンテスト	山口県社会福祉会館	山口県国際課 スピーチ指導補助
	西華大学訪問団	山口大学	通訳
12月	J-CAT 研究補助 受託研究員交流	島根大学	島根大学日本語教育視察 受託研究員(寧夏大学日 本語教員)との交流
	留学生懇談会	山口大学	スピーチ指導助手
平成19年 1月～2月	一時帰国	西華大学	日本語教育事情調査研究
3月	中国の日本語教育調査研究	中国協定校 (赤木・劉)	西華大学・北京師範大 学・北京人民大学
	J-CAT 文字語彙班会議	国際センター宇部室	文字語彙アイテム中国語 チェック
	コーパス報告会	東京 東京大学	コーパス ロシア人研究員と懇談
4月	J-CAT プレースメント テスト	メディア基盤センター	国際センター
	日本語授業開始	共通教育	国際センター
	日本文化体験・茶道		国際センター
5月	授業実践		国際センター
	論文発表	中国学会誌	
6月	ホームステイ	山口市	
7月	送別会		ホストファミリー
	送別会	防長苑	国際センター
	中国の日本語教育調査研究	上海交通大学	
	帰国		
8月～1月	論文作成, 指導法の実践, 教材開 J-CAT プレテスト協力	西華大学	自律研究
平成20年3月	中国の日本語教育研究調査	西華大学(赤木) 山口大学	デジタル教材作成, 調査 研究
	来山予定		

【引用・参考文献】

[ 1 ] 赤木弥生 「中国の中高等学校における英語教育」 大学英語教育学会中国・四国支部  
アジア地区大学英語教育研究会研究報告「ア

ジアの英語と英語教育」第3集, 1998

[ 2 ] 赤木弥生, 島幸子 「戦争の文化から平和の文化～ LINGUAPAX の提唱を英語教育に導入～」全国語学教育学会山口支部研究紀

- 要 第4号, 1998
- [ 4 ] 王健宣「中国の大学の日本語専攻における問題」『中国21』 Vol. 27, 2007
- [ 3 ] 膨広陸「中国における日本語教育事情」『中国21』 Vol. 27, 2007
- [ 4 ] 川口義一「わかりやすさ」の実態－初級クラスの授業実践における技術的側面－  
早稲田大学日本語教育研究センター紀要20 pp 19
- [ 5 ] 佐治圭三ほか「中国における日本語教育の移り変わり」『中国21』 Vol. 27, 2007
- [ 6 ] 宿久高・周異夫「日本語教育の中の文学と文化 中国における現状と課題」『日本語教育』133号 pp 28
- [ 7 ] 陳俊森「中国の大学日本語教育の現状と改革の展望」『中国21』 Vol. 27, 2007
- [ 8 ] 前田綱紀・押尾和美「中国における日本語教育」国際交流基金日本語国際センター HP  
[http://www.jpf.go.jp/j/world/chek/wld\\_03\\_09.html](http://www.jpf.go.jp/j/world/chek/wld_03_09.html)
- [ 9 ] 日本語教育指導者養成プログラム 国際交流基金日本語国際センター HP  
[http://www.jpf.go.jp/j/world/chek/wld\\_03\\_09.html](http://www.jpf.go.jp/j/world/chek/wld_03_09.html)
- [ 10 ] 劉玉茹「中国四川省西華大学日本語教育事情」大学教育
- [ 11 ] Jack C. Richards and Theodore S. Rodgers Approaches and Methods in Language and analysis
- [ 12 ] R.C. スカセーラ/R.L. オックスフォード「第2言語習得の理論と実践 タバストリーアプローチ」